

第13回 海における次世代モビリティに関する産学官協議会 議事概要

日時：2026年3月17日（火）10:00-11:30

方式：対面、オンライン併用（Microsoft Teams）

現地会場：中央合同庁舎2号館1階 3A会議室（会場/オンライン併用）

【概要】

事務局より「次世代海洋モビリティビジョン」の概要、本文、資料集について、前回の委員会で挙げられた意見を元に、修正案について説明が行われた。これに対して、構成員と意見交換が実施された。また、会議冒頭及び閉会時に総合政策局長からの挨拶が行われた。

【冒頭の総合政策局長挨拶】

- ビジョン策定に向けた議論は、1年前に行った「更なる社会実装に向けた課題整理」から始まった。
- 新たな産業であり統計情報等も少ない中、幅広い情報を収集し、統合・整理してくださった海洋産業研究・振興協会の皆様、複雑な議論をまとめていただいた道田座長、忌憚のないご意見をいただいた構成員の皆様に感謝。
- 最近では、安全保障や経済安全保障への関心の高まりもあり、日本成長戦略の海洋WGにおいて主要な製品・技術の筆頭に「海洋無人機（海洋ドローン）」を挙げて議論が進められている。さらに、ロボティクスやAI、通信など幅広い技術領域、異業種とのシナジーを通じた海洋人材の確保・育成への期待も高まっている。
- このような流れを踏まえ、今回のビジョンがこの分野になじみの深くなかった方々にも関心をもってもらう契機になるとよい。その意味で、ビジョンの名前の付け方については更に一工夫する余地があるのではないかと考えており、これらの点を含め忌憚のないご意見を願います。

【構成員からの主な発言】

- 概要資料（資料1-1）について、情報の密度は高いが、「次世代海洋モビリティ」が何を指すのかが一見分かりにくい。たとえば、現状の説明箇所の項目を「次世代海洋モビリティとそれを巡る現状」とし、本文の冒頭にあるような定義（AUV、USV等によるデータ収集・分析など）を最初に持ってくるなど、編集上の工夫があれば、初めて読む人にも分かりやすい。
- 以前は「水中ドローン」という言葉について議論されたが、今では「Maritime Drone」という言葉も一般的になりつつある。このビジョンでも「海洋ドローン」という言葉を併記しても良い。また、「スマートブルーエコノミー」という言葉についても、「エコシステム」という概念とあわせて、新しい市場を創出するという意味合いがより明確に伝わると良い。用語

の定義において、名称が幾つかあるため USV が ASV に含まれる旨等を加えられれば、今後の基準として読む人にとってより正確な理解に繋がる。

- 概要資料（資料 1-1）の課題の整理について、「事業化のハードル」の中に「海域利用の手続きが煩雑」という記載があるが、事業化の真のハードルは収益化の部分にある。海域利用の手続きの煩雑さはそれ自体として重要な課題であり、項目を分けて記載すべき。
- 海洋経済について、ESG 投資やブルーファイナンス等、新しい金融の流れや投資が集まる仕組みについても、一言あると経済としてのボリューム感がより伝わる。
- 名称は一度決めたら「次世代海洋モビリティ」と言い続けることが重要。国の成長戦略とも足並みを揃えて推進していくべき。
- バリューチェーンについて、産業アーキテクチャとして機能や関係性を表す方が分かりやすいのではないか。例えば、気象データや海水温データが漁業者だけでなく、台風予測等の他の産業でも活用されるような価値の広がりが示せると良い。
- 報告書の副題にある「海洋 DX」という言葉は冗長。「スマートブルーエコノミー」に内包されるのであれば、外しても良いのではないか。
- UUV という言葉については、防衛分野等では AUV と ROV の両方を含む総称として使われることが多いため、定義の箇所での旨を補足すると正確。
- USV についても、特に自律型を強調する場合には ASV と呼ばれる旨を記載しておく、専門外の方にも分かりやすくなる。
- モビリティと DX はセットで新しいエコノミーが生まれるという文脈であれば、あえて DX の目線を残すという考え方もある。
- 副題の「海洋 DX」については、本文中でもそれほど深く触れられていない印象であり、ブルーエコノミーの中に包含されるものとして整理し、削除しても良い。
- 海洋 DX の進展がスマートブルーエコノミーに繋がると期待されているので、包含されていると見てよい。デジタルはトランスフォーメーションの一つの手段であり、矛盾のない形でまとめられれば。
- 今後は「見える化」がもたらす経済的な広がりが重要。海の中がリアルに、かつ低コストで継続的に見えるようになることは、経済的にも非常に大きなインパクトになる。また、実証フィールドについて、海は非常に過酷な環境であり、穏やかな時に数回成功しただけでは不十分で、長期的な実証ができる環境が必要。海外の事例にあるような、技術開発を加速させるための実証拠点の重要性を、今後の展望としてより強く意識できれば。
- 政府の成長戦略との整合性を持って取りまとめもらうとは大変良いこと。黎明期にあるこの分野では、公共調達との連動等によって初期需要を創出し、海洋ロボットを使う機会をより増やすことが、将来的な市場拡大に直結する。
- 「デュアルユース」の箇所について、MOSA（モジュール型オープンシステムアーキテクチャ）という言葉が出ているが、防衛用語のニュアンスが強く、民生利用としては少しハードルが高すぎる印象がある。モジュールやインターフェースといったアーキテクチャの考え方として参照するにとどめ、既存の ISO や JIS 規格の活用等より広い意味での標準化として記述す

る方が、受け入れやすいのではないか。

- 制度整備に関連して、機材の安全性や性能評価を公的に担保する仕組みについても触れるべき。公的に担保された場所で性能試験を行い、エビデンスベースで安全性を評価できる環境があれば、利用者が安心して導入できる産業の醸成に繋がる。
- 名称に関して、「ドローン」は無人機の一般的な表現として認知されてきている。用語解説として、用語（USV、ROV、UUV等）の定義が本文中に文章はあるが、一目で関係が分かるような樹形図があると読者の理解がより進む。

【閉会時の総合政策局長挨拶】

- 活発なご議論に感謝申し上げます。ビジョンの名称と今後の進め方については、本日のご議論を踏まえて事務局から修正案をお示しし、その上で皆様のご意見をいただいて、ビジョンを最終化したい。
- 概要の1枚紙は内容を詰め込みすぎであるため、場合によっては複数枚とし、広く世の中の方々に参入してもらうためのきっかけとなる資料になることを意識して修正したい。
- このビジョンが、現在海に関わっていない方々も含め共通の土台になることを期待している。
- 国交省としても、日本成長戦略の議論も踏まえながら、関係省庁・部局と連携した新たな取り組みの第一歩としたい。今後ともご指導とご協力をお願いする。

以上